

## ヨハネの手紙第一3章4-24節 「神の子どもと悪魔の子ども」

### 1A 義を行う者 4-10

1B キリストにとどまる者 4-6

2B 神の種 7-10

### 2A 兄弟を愛する者 11-18

1B 死といのち 11-15

2B 行いと真実の愛 16-18

### 3A 神の前にいる者 19-24

1B 確信にある心の安らぎ 19-22

2B 兄弟を愛する命令 23-24

## 本文

ヨハネ第一の手紙3章です。前回、3章3節まで学びましたので、4節から一節ずつ見ていきます。ヨハネは、2章の最後、29節から、「義を行う者は、神から生まれている」という話をします。主が再び来られる時に、神から生まれた者、神の子どもたちは、キリストに似た者になることを、3章2節で教えました。

### 1A 義を行う者 4-10

そして4節からですが、神から生まれた者は、罪を犯さないことを話していきます。そう教えていない者たちがいたからです。罪を犯しているのに、神を知っていると張り張るのが、反キリストとヨハネが呼んだ、偽教師たちでした。その偽りに対して、真理で対抗します。

### 1B キリストにとどまる者 4-6

<sup>4</sup> 罪を犯している者はみな、律法に違反しています。罪とは律法に違反することです。

ここの律法は、シナイ山でモーセに与えられた律法とは限りません。主が命じられたこと全般が律法です。主が語られているのに、それに聞き従わず、逆らっている時に、それが罪と呼ばれます。アダムが罪を犯したと言う時は、主が、善悪の知識の木から、実を取って食べてはならないと言われたのに、それに違反して、食べたので罪を犯したと言われます。

ちゃんと、福音を聞いて、信じている人々、みなさんは、当たり前のことだと思いかもしれません。けれども、知識という名による惑わしは、そうした当たり前のこと、明白なことを分からなくさせます。その知識によって、自分のしていることが、神にとって罪であることもかき消されてしまうのです。知識があることが霊的であり、神に近いとみなしているのに、その行っていることが、罪を犯してい

るのかどうかを問題にしなくなります。

例えば、過去の環境がそうしたのだということで、主ご自身が語られていることに違反していることを相殺します。その人が生まれながらのものなので、直しようがないのだとして、主の語られていること、律法に違反しているということ自体を相殺しますね。他にも、いろいろな知識と呼ばれるものによって、罪を犯していることを覆い隠すのです。ヨハネの時代は、グノーシス主義ですから、体でしていることは元々悪だから、何をしても関係ないとしていましたから、神の律法に当たり前のように違反していました。

<sup>5</sup> あなたがたが知っているとおりに、キリストは罪を取り除くために現れたのであり、この方のうちに罪はありません。

ここに福音、良い知らせがあります。「キリストは罪を取り除くために現れた」のです。ただ、罪を覆うだけではありませんでした。罪を犯したけれども、それを見過ごす、赦すということだけではなくのです。取り除いてくださいました。罪の力を失わせたのです。罪が、自分を支配しないようにしてくださいました。「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にするのでしょうか。」

さらに、キリストには罪がありません。罪は背負われましたが、ご自身には罪はありませんでした。グノーシスの異端の教えでは、この方は肉体を取られなかった、仮に現れたのだとしました。なぜなら、肉体は悪だとみなしていたからです。けれども、主は肉体を持っていながら、罪から離れていたのです。

<sup>6</sup> キリストにとどまる者はだれも、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見たこともなく、知ってもいません。

5 節の論理的帰結は、これです。私たちからキリストが、罪を取り除き、キリストには罪がないのですから、この方にとどまれば、罪は犯さないということです。「とどまる」という言葉は、交わると言い換えていいです。宿泊すると訳すこともできます。ですから、罪を犯さないのです。

しかし、一度も罪を犯さないという意味ではありません。「罪を犯しません」というのは、一つの罪ではなく、罪全般です。罪を犯しているような歩みをしないという意味です。習慣的、生活のあり方として罪を犯していないということです。

けれども、そういった意味で「罪を犯」しているならば、その人はキリストを知っているのしょう

か？いいえ、知らないというのがヨハネの答えです。キリストを知らないだけでなく、見たこともないと、はっきりと言っています。偽預言者について、イエスが言われた言葉を思い出しましょう。「マタ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」

## 2B 神の種 7-10

<sup>7</sup> 幼子たち、だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しい方であるように、正しい人です。

ヨハネは、「幼子たち」と、信じてもまだ間もない人々を意識して語りかけています。幼子たちには、あらゆる惑わしの力がやってきます。偽教師たちが近づき、その信仰を奪い取ろうとします。2章 18節では、多くの反キリストが現れているということを幼子たちに警告しました。

反キリスト、または偽教師たちは、義を行っておらず、罪を犯しているのに、義人のようなふるまいをしていたと考えられます。そして、信仰の小さき者たち、キリストに倣って生きて行こうと精いっぱい、努めている者たちを見下し、「あなたがたは真の知識に達していない」と見下げます。そういった彼らの惑わしに対して、「義を行う者は、キリストが正しい方であるように、正しい人です。」と言っているのです。

私たちは、何度となくこの手紙の中で、キリストに倣って歩むことを教えられています。「2:6 神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません。」とありました。そして、キリストが現れたら、この方に似た者になり、その希望を抱いている者は、キリストが清いように、自分を清めると言っていました。この方が私たちの目標なのです。しかし、これらの者たちは、その地味な営みを見下げているのです。

<sup>8</sup> 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。その悪魔のわざを打ち破るために、神の御子が現れました。

罪を犯している者たちの背後の存在を、はっきりと伝えています。悪魔です。主は、ユダヤ人たちとのやり取りで、はっきりとこのことを言われたことがあり、それに基づいてヨハネは教えています。「ヨハ 8:43-44 あなたがたは、なぜわたしの話が分からないのですか。それは、わたしのことばに聞き従うことができないからです。あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません

ん。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。」

このイエスの言葉を使って、ユダヤ人が悪魔の子であるという解釈を教会が施し、反ユダヤ主義が長く続きましたが、完全に間違った解釈です。ここは、イエスが、「わたしのことばに留まれば自由になる、罪から自由になる」と言われた時に、それに聞き従えないユダヤ人たちがいて、イエスを殺したいという思い、殺意が心にあったからです。彼らは、自分たちの父は、アブラハムだと言っていたので、主は、「アブラハムはそんなことをしない、人を殺すようなことはしなかった。」と言われました。そして、神が私たちの父だと言ったので、「あなたがたは、神ではなく、悪魔を父としているのです。」と言われました。

ですから、「悪魔から出た者」というのは、罪は、悪魔から始まっているということです。エデンの園で、蛇のかたちをして、エバをそそのかしたのですが、その前に悪魔自身が、高ぶりの罪を犯していました。「イザ 14:12-15 明けの明星、暁の子よ。どうしておまえは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしておまえは地に切り倒されたのか。13 おまえは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山で座に着こう。14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』15 だが、おまえはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」初めから罪を犯していました。悪魔は、その同じ道を歩ませようとしているのです。これをもって、罪を犯している時は、悪魔から来ているということです。

しかし、「その悪魔のわざを打ち破る」ために、御子が現れました。悪魔が、もはやキリストを信じる者には、罪を犯させる力を持たないようにしています。アダムが罪を犯してすぐに、神は蛇に対して呪いを宣言されました。「創 3:14 神である【主】は蛇に言われた。「おまえは、このようなことをしたので、どんな家畜よりも、どんな野の生き物よりもものろわれる。おまえは腹這いで動き回り、一生、ちりを食べることになる。15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」かかとを打つというのは、闇の勢力によってイエス様は捕らえられ、十字架に磔にされたことです。しかし、彼が気づかなかったのは、その十字架におけるキリストの御業が、悪魔の脳天を打ち砕くものであったということです。

ヘブル書の著者はこう言っています。「2:14-15 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、15 死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」キリストの死とよみがえりによって、悪魔はもはや、私たちを支配する力をなくしてしまったのです。

<sup>9</sup> 神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。神の種がその人のうちにとどまっているからです。

その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。

罪を犯している者が悪魔から出ているのに対して、神から生まれた者は罪を犯しません。これは再び指摘しますが、一度も罪を犯さないということではなく、罪を犯し続ける歩みをすることはできない、ということです。

ここで興味深いのは、「神の種がその人のうちにとどまっているから」と言っていることです。植物の種が土に落ちて、芽を出し、成長し、実を結ばせるときに、それはその種を持つ同じ種類の植物の実であることが分かります。人も同じで、子種と言ったら分かりやすいでしょう。男性の精子にある DNA 情報をもって、そこから生まれてくる子は親の DNA を受け継いでいるのです。それと同じように、神から生まれた者は、神からの種を持っています。

ヨハネは福音書の中で、この話を伝えています。「1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」自分の肉なる力で神のみこころを行い、正しいことをすることはできないことを教えられます。私たちが自分の意欲で生まれてくることができただけでしょうか？いいえ、そうではないですね。

こうした神との結びつきによって、私たち、「罪を犯すことができない」と言っています。神のご性質にあずかっているため、罪を犯し続けることはできないのです。パウロは、「Ⅱコリ 5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。」と言いました。新しい性質にあるので、古い習慣があっても、もうそこに留まることができなくなるのです。悪魔は、古い自分がいるのを「ほら、何も変わっていない」と言い含みますが、いいえ、新しく造られた自分があり、古い自分は残像、残骸にしかならないのです。パウロは言いました、「ロマ6:2 罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。」

<sup>10</sup> このことによって、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします。義を行わない者はだれであれ、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。

神から生まれるということについて、神の子どもであることについて、二つの意味があります。一つは、その性質にあずかることです。種が与えられていますから、その性質が与えられています。もう一つは、従順です。父と呼ぶのですから、その父の言うことに聞き従う、その父に倣う者になります。従っているからこそ、言われていることを行なっているからこそ、その子どもと言えるのです。例えば、パウロは、光の中に歩んで、神に倣うことを、光の子どもと呼んでいます。「エペ 5:8-あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあつて光となりました。光の子どもとして歩みなさい。」

そして、悪魔の子どもとの区別がはっきりしている、と言っています。義を行っていなかったら、罪を犯し続けていたら、その人は神から出ておらず、悪魔から出ているのです。悪魔の子どもなのです。イエスは、教会の世界に、悪魔から出る者たちがいることを前もって、毒麦の喩えで語られました。(マタイ 13:24-30)畑に、毒麦の種が蒔かれて、毒麦が現れたのですが、主人は、収穫まで両方とも育つままにしておきなさいと言いました。そして、終わりの日に、刈り取る者たちに、毒麦を集めて焼くために束にして、良い麦は集めて、主人の倉に納めなさいと言いつけます。それが、天の御国において起こることです。

そこで、義を行わないことの一つとして、「兄弟を愛さない者もそうです」と言っています。

## **2A 兄弟を愛する者 11-18**

### **1B 死といのち 11-15**

<sup>11</sup> 互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。

ヨハネは、2章で新しい命令として、主から与えられていることだと話していました。

<sup>12</sup> カインのようになってはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。

互いに愛し合うことにおいて、カインが反面教師として取り上げています。ここでまず、「彼は悪い者から出た者」と言っています。これは、8節の「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。」の続きです。彼は弟を殺すのですが、悪魔は初めから人殺しです。

創世記にある話を思い出しましょう、4章 1-8節を読みます。「<sup>1</sup>人は、その妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は、主によって一人の男子を得た」と言った。<sup>2</sup>彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは大地を耕す者となった。<sup>3</sup>しばらく時間が過ぎて、カインは大地の実りを主へのささげ物として持って来た。<sup>4</sup>アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。主はアベルとそのささげ物に目を留められた。<sup>5</sup>しかし、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それでカインは激しく怒り、顔を伏せた。<sup>6</sup>主はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。<sup>7</sup>もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」<sup>8</sup>カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。」

これを読むと、第一印象として、神がアベルに対してえこひいきしているのではないかと見えます。けれども、前後関係、文脈を見ないとはいけません。この出来事は、アダムが罪を犯して、神

が呪いを宣言した後のことです。神は、「創3:18 大地は、あなたに対して、茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。」そして、神が、「3:21 アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。」とあります。土地から労して出て来るものが、呪われたものとなった一方で、皮の衣と言っていますから、動物が屠られて、犠牲の血が流されたのです。ここで神が、罪を犯した者に対して、その罪を覆う方法を確立されたのです。身代わりに流される血です。神が、善悪の知識の木からの実を食べるなら、必ず死ぬと言われました。罪を犯す報酬は死なのです。その身代わりに血を流す命があり、その犠牲によって近づくことによって、神が罪をお赦しになります。

そこで、どちらも神の前に供え物、あるいはいけにえを献げています。カインは大地の実りを主へのささげ物として持って来ています。自分は耕す者で、その行ったことを神の前に持って来たのです。しかし、土地から出て来るものは呪われており、自分の行いによる結果は、神は受け入れないのです。けれども、アベルは、犠牲の子羊を献げました。神が願われていた、血を流すいけにえです。しかも、アベルは最も大事な初子から、しかも肥えた最上のものを持って来ました。ヘブル書 11 章 4 節には、「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。」とあります。神から与えられていた、罪の赦しの道を信じ、それにしたがっていけにえを献げたのです。カインは、自分の正しいと思う道を選んだのです。

そのためカインは、自分は正しい心で献げていないことを知っていました。主が、「<sup>7</sup> もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」と言われたのです。主がこのように警告を与えていたのに、その怒りと落ち込み、そして妬みの思いを治めることをせずに、アベルを殺したのです。

<sup>13</sup> 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。

世が憎しみを抱いていることについては、世が悪い者の支配にあるから驚くべきことではありません。さらに、自分たちに世が憎しみを抱いても、驚くことではありません。イエスが語られています。「ヨハ 15:18-19 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」

自分たちが神から生まれているので、私たちがいることで、カインがアベルによって自分の闇が明らかにされるように、明らかにされるのです。自分たちは何でもない者たちなのに、何で、この人たちはこんなに憎むのか？と驚いてしまうのです。それは、自分たちではなく、自分たちを通して、

その人が、光によって自分の闇を明らかにされるので、憎むのです。

<sup>14</sup> 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。

ご自分の御名を信じれば、罪の中に死んでいたのに、新しく生まれることを、主は教えられました。それを、「自分が死からいのちに移った」と言われました。「ヨハ 5:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」

そして、死からいのちに移ったしるしは、「兄弟を愛している」ということなのです。御霊によって、神から生まれました。キリストにあって互いにつながっています。聖餐は、キリストのからだと血にあずかることで、そのつながりを体現しています。だから、兄弟を憎むことは、自分自身を憎むことなので、することができません。

それにも関わらず、「愛さない者は死のうちにとどまっています」と言っています。まだ、救われていないということです。神によって新たに生まれていないということです。ヨハネは、教会から出て行った者たちのことを、2章で話していました。御子と御父との交わりが、教会の交わりです。そこから離れているのですが、もともと仲間ではなかったとヨハネは言いました。そう、まだ死のうちにとどまっているのです。

そうなので、自分の仲間だと思っていたら決して言えないこと、決して行えないことをしている人々が、教会の世界の中にもあります。そういった人々について、私は、恐れを抱きます。どうして、神の領域に触れてしまうのか？という恐れです。交わりや共同体の意識がないのです。

<sup>15</sup> 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがとどまることはありません。

強い言葉ですが、これはイエスの言葉に裏付けされています。「マタ 5:21-22 昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」内面で、その人はいなくなったらいいと願っていたら、それが殺人へとつながるのです。この直接的な関係を偽って、心に憎しみを抱きながら自分は、いのちを持っているとするのは偽りです。



## 2B 行いと真実の愛 16-18

<sup>16</sup> キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

殺すのは、人からいのちを取ることです。愛は、自分のいのちを与えることです。自分を生かすために、相手の存在を認めないようにするのか？それとも、相手を生かすために、自分を犠牲にするのか？それによって、憎しみと愛の違いが出てきます。

イエスが弟子たちに言われました。「ヨハ 15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」そしてパウロも言っています、「ロマ 5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

「私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです」とまで、ヨハネは言っています。キリストがそうであったのですから、キリストのように歩むように命じられている私たちも、そうすべきだということです。これは何も、文字通り自分のいのちを捨てるということ以上のことですね。コリント第一 13章においては、「自分のからだを引き渡して誇ることになっても、愛がなければ、何の役に立ちません。」とあります(3節)。

兄弟のために、いのちを捨てるとは、キリストがそうであったように、弟子たちのために、ご自身のものを分け与えつづけ、犠牲を払われたというところに本質があります。そして、いざとなったら、いのちを捨てます。ご自身がいのちを捨てることで、友が生かされるのですから、捨てるのです。愛のゆえに捨てます。

<sup>17</sup> この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。<sup>18</sup> 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。

愛というのは、口だけでなく、憐れみの行いの中に現れます。これまで、神を知っていると言いながら、これこれをしていたら、偽りであるということをヨハネは言ってきました。兄弟を愛するというのは、一歩、踏み出て行動に移すところに現れます。イエスのお働きがそうでした。「マタ 9:35-36 それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病氣、あらゆるわずらいを癒やされた。36 また、群衆を見て深くあわれまれた。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。」

主は、行動に移されるのです。ヨハネ 9章に、「イエスは、通りすがりに、生まれたときから目の

見えない人をご覧になった。(1 節)」とあります。ここをご覧になる、とは、じっと見るというような意味合いがあります。だれも、見向きもしないのに、関心を持って見つめるという意味合いです。ここが、キリスト者の愛です。口で愛しているというのは簡単ですが、キリストの愛を抱いていれば、他の人たちが気づかないことにも気づき、祈り、行動に移せるのです。

### **3A 神の前にいる者 19-24**

#### **1B 確信にある心の安らぎ 19-22**

<sup>19</sup> そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。

午前礼拝で学んだところですが、ここでは、兄弟を愛するところのつながりで見たいと思います。愛することを、行いと真実をもってしているところで、自分自身が真理に属していることを知ります。キリスト者の信仰は、静的なものではありません。静的とは、停まっているという意味です。動いていない、溜めた水のようなものです。動的なものです。主に命じられたら、それを行っていくという、行動しながら信じていくものです。そうすると、自分が真理に属していることが分かるのです。偽りではなく、真理に属しているのが分かるので、神の御前に心安らかにしていられます。これは、キリスト者でいることの醍醐味です。

<sup>20</sup> たとえ自分の心が責めたとしても、心安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。

ここをじっくりと、午前礼拝で説明しました。私たちは、自分が、主から命じられていることを十分にできていないという思いが、強く残っています。したがって、心が責められるのです。けれども、心配に及ばないということを、ヨハネはここで話しています。それでも、心安らかでいられるといえます。というのは、私たちが何かをしていること以上に、神ご自身が大きなお方で、私たちを愛して、私たちを選び、祝福しようとしておられるからです。

<sup>21</sup> 愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。

たとえ、自分が十分に神の命令に従えていないと感じていても、大丈夫なのですが、主の命令に従えているのであれば、それは大きな祝福です。兄弟を愛することにおいて、行いと真実がともなっているならば、その時に主が来られても、自分は確信を持っていることができます。忠実なしもべとして、主人からほめられるのですから。

<sup>22</sup> そして、求めるものを何でも神からいただくことができます。私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。

これは、イエスが何度となく、弟子たちに語ってくださったことですね。「ヨハ 14:13-14 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。」けれども、その大きな、広い約束は、次の言葉が条件です、「14:15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」主を愛して、その戒めを守るなかで、求めるものは何でも、神からいただけるということです。ここでも、ヨハネが、「**私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているから**」と言っているとおりで。

これは、イエスご自身が実践しておられました。ラザロが死んだけれども、よみがえらせることについて、主は言われました。「ヨハ 11:41-42 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」ラザロをよみがえらせる前に、主は父に願っておられました。みこころを行っている上で、父に願うものは、何でもかなえてくださる、ということなんです。

そしてここ、ヨハネの手紙では、兄弟を愛するという点において、求めるものを何でも神からいただくことができるということでもあります。

## 2B 兄弟を愛する命令 23-24

<sup>23</sup> 私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です。

この二つが、まとめです。一つは、御子イエスの御名を信じることです。これは、福音書で数多く、ヨハネは語りました。「20:31 これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。」そして、ここ手紙では、兄弟を愛するというイエスの命令をさらに取り上げています。信仰だけではなく、信仰と愛です。ガラテヤ書では、パウロはこう表現しました。「キリスト・イエスにあって大事なものは、**愛によって働く信仰**なのです。(ガラテヤ 5:6)」

<sup>24</sup> 神の命令を守る者は神のうちにとどまり、神もまた、その人のうちにとどまります。神が私たちのうちにとどまっておられることは、神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります。

これもまとめです。これまで、ヨハネは、御父と御子との交わりについて話していました。それは、神の命令を守っている中で可能です。守っている時に、神のうちにとどまっています。神もその人のうちにとどまります。両方向でとどまっているので、交わりです。

それから、「神が私たちに与えてくださった御霊によって分かります」と言っています。ヨハネは、御霊の働きについて、4章から詳しく話していきます。御霊が、神との交わりについて、はっきりと分かるようにして下さります。

そして、次回は霊について語っていきます。偽りの霊と、神からの霊の違いの見分け方です。